

●特別賞〔論文概要紹介〕

岩手県釜石小学校と 交流を深め、共に学ぶ 復興教育

愛知県碧南市立棚尾小学校 かねこ 金子^こてる子

【実践の概要】

東日本大震災を契機に、私たちは学校生活の中で何ができるかを児童と共に考え、持続可能にしていく復興教育を実践した。まず『『義援米（後に友情米と命名）・友情芋』を贈ろう』と題し、2年間を見通した指導と段階的な到達目標を組み込んだ復興教育プログラムを作成し実践を進めた。

この実践では、児童は教育課程の中で発達段階に応じた支援活動を具体的、創造的に考え、主体的に持続可能な復興支援活動に取り組んだ。そして、釜石小学校の子どもたちとの交流は、自分たちの防災活動にまで発展した復興教育となった。

【論文内容の紹介】

1 研究内容

(1) 研究の視点

- ① 復興支援活動を教育課程に位置づけ、東日本大震災の被災実態を見つめる学習活動の中で、復興支援活動を具体的、継続的に発展させていく。
- ② 地域・行政の協力などを得る。
- ③ 児童の関心の高い岩手県釜石小学校と連携を図り、具体的な復興支援活動にする。

(2) 実践内容

- ① 友情米を贈ろう…2011年4月～

本校では5年生で碧南市所有の「平和ふれあい農園」で田植え体験活動を行う。児童は「採れるお米は、自分たちで全部使わずに被災地にも贈りたい」と収穫米を被災地へ贈ることを発案した。そして、岩手県釜石小学校の児童が津波から全員無事に避難できたことを知り、それを候補とした。被災直後の児童の決断に、釜石小学校の加藤孔子校長先生は「何もかもがありません。PTA活動の費用もなく、助かります」とのこと。秋には収穫米400kgを友情米として贈った。

- ② 友情芋を贈ろう…2012年4月～

6年生になった児童は児童会役員が中心になって、農家から借りている約500m²の栽培畑に、150本の金時芋の苗を6年生と1年生児童とで植え収穫した。収穫できた100kgを釜石小学校へ友情芋として贈った。

- ③ 友情鶴を交換しよう…2013年1月

友情米・友情芋交流は、本校が小原和紙工芸創設者藤井達吉氏の母校であることから、釜石小学校と本校と併せて3月11日の復興への思いを込めて、311羽の鶴にする活動へと発展した。この活動は、フランスボルドー市サン・レミ教会でも紹介され「日本がんばってね」「すばらしい交流です」などフランス市民からメッセージが届いた。

- ④ テレビ防災集会…2013年3月

東北にある釜石小学校の児童と直接顔を合わせて交流するのは難しい。そこで、2013年3月11日、同じく釜石小学校を支援する東京・第二亀戸小学校の提案でテレビ会議システムを活用し、防災集会を開くことができた。釜石小学校の児童から語り部として貴重な体験を聞くことができた。

2 研究の成果と課題

2011年度から始まった復興支援活動は後輩に受け継がれ、3年目を迎えた。毎年5年生が友情米、6年生が1年生と共に友情芋を育てている。今年度で友情米は1,000kg、友情芋は230kg

に達した。地域や行政の協力を得て、両校の持続発展可能な教育活動になった。今後は、東日本大震災を風化させることなく、釜石小学校との連携をさらに発展・深化させていくことが必要と考える。

●奨励賞【論文概要紹介】

言語活動を充実させ、 気づきの質を高める 生活科の授業の創造

愛知県岡崎市立常磐小学校 うちだ かすみ 内田佳寿美

【実践の概要】

本論文は、小学校1年生の生活科の実践をまとめたものである。

学習指導要領が改訂され、本格実施となった。生活科の学習指導要領に挙げられた「これまでの問題点」と「その改善点」、またどの教科においても言語活動の重要性がうたわれていることに着目した。

このことを踏まえ、1年生が長期に渡って取り組む生活科「あさがおの栽培活動」を軸に、他教科との関連を図った単元計画を立てて実践することにした。

【論文内容の紹介】

主に、あさがおの生長を自分の言葉で歌詞(替え歌)にし、友達とかかわりながら活動していく。この活動を通して、言語能力を養い、気づきの質を高めていく姿を期待した。以下のような手立てを講じて実践した。

1 主題に迫るための手立て

- ① 他教科との関連を図った単元の計画
 - ・文字の読み書きや発言の仕方など、国語科の学習とタイアップさせることで、言語活動の幅を広げる。
 - ・観察カードに書いた言葉や思いをもとに、あさがおの生長を替え歌にする。
- ② 個の学びの充実と協同的な学びの発展
 - ・観察用紙を常設し、気軽に記入できるようにする。文でも絵でもよいとする。朱書きとともに、観察の視点となる絵文字(五感のマーク)を記し、見合える環境を整える。
 - ・2年生に質問したり、一緒に活動したりする機会を大いに設ける。
- ③ 友達とかかわり合いながら言語に触れる場面の設定
 - ・あさがおの様子について発表し合う機会を保障する。あさがおに対する思いや気づきを伝えたり比較したりして、共に学び合える場を提供する。
 - ・替え歌作りの活動では、同じ視点で観察して歌詞作りをしている子どもをグルーピングする。互いに歌い合い見せ合うことで個々の表現の仕方を知る機会とする。

2 実践の成果

観察カードに書きたい文字と、50音表とを照らし合わせての読み書きの学習、習った話型の言葉を置き換えての発表は、観察意欲を持続させ、国語力を身に付けるよい手立てであった。

観察カードは絵でも文でもよいとしたことで、観察カードが身近なものとなり、多くの子どもがたくさん日記を残すことができた。帰りの会など短い時間を使って頻繁に発表し合うことは、あさがおの生長の時期を逃さず、情報の交換や共有ができて効果的であった。

観察したことを替え歌にすることで観察眼が育ち、多くの発見ができた。「歌を作るためによく観察する→観察する視点が育つ→視点が育

つからより詳しく表現できる」といった相乗効果が生まれ、長期に渡り飽きずに深くあさがおとかかわることができた。言葉を吟味する歌詞作りは、子どもの言語力を高める有効な手段となり、気付きの質を高めることに結び付いた。

3 まとめ

「今日であさがおを抜いて、さようならするよ」という教師の言葉に、「嫌だ、かわいそう」と抜くことに抵抗を示す子どもがたくさんいた。長期に渡りかかわってきたあさがおへの愛着と言えよう。あさがおはリースとなって教室に飾られ、子どもたちの目を楽しませた。

幼稚園・保育園との交流会では、「あさがおまつり」を開こうと、アイデアを出して準備に奮闘した。あさがおクイズをはじめ、あさがおに関するコーナーをいくつか用意した。自分よりも小さい子どもにわかるようにルールを説明することはとても難しいが、とても上手に、自分なりの言葉を選択して説明することができた。これまでの言語活動の成果と実践の有効性を確認できた。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

学校を活性化するための 主幹教諭としての取組 ～職員・保護者・児童の3つの 視点から～

宮崎県延岡市立東小学校 う つ の み や ひ ろ し
宇都宮 浩

【実践の概要】

本論文は、主幹教諭1年目として、職員や保護者、児童との関わりによって学校を活性化さ

せるために行った取組をまとめたものである。
(本校としても初めての主幹教諭設置)

職員・保護者・児童という3つの視点で、学校活性化のために主幹教諭ができることを考え、様々な取組を行った。

実践を通して、主幹教諭についての職員や保護者の理解を深めるとともに、学校の教育活動を推進・充実させることができた。全国で配置の進む主幹教諭の職務を意義あるものにするための手立てを、明らかにすることができたと考えている。

【論文内容の紹介】

1 職員に関わる取組

(OJTの視点を生かして)

職員に関わる取組として、①週計画案や専科計画案の早期提案、②校務分掌の部長及び学年主任との緊密な連携、③提案文書及び通知表へのアドバイス、④積極的な情報提供（主幹教諭だより、週計画案）、⑤講師への直接的な指導、⑥日常的なコミュニケーション等を行った。

特に、職員への情報提供に力を入れた。日常的なコミュニケーションに加え、職員向けの『主幹教諭だより』を発行し、職員のパワーアップを推進した。内容は、学級経営や保護者との連携、教科の指導について等、自分の学級担任としての経験を生かしたものである。

また、教職経験の少ない職員に対して、学級経営のポイントや、参観日・家庭訪問の進め方など、具体的なアドバイスを積極的に行った。さらに、通知表の所見の下書きの推敲も積極的に行った。

2 保護者に関わる取組

保護者に関わる取組として、①PTA活動への参加、②積極的な情報提供、③メール配信システムの確立等を行った。

PTAの組織に主幹教諭の役割（連絡調整）を加えていただき、PTA執行部と学校とのパ

イブ役となった。さらに、保護者向けの『主幹教諭だより』を発行し、主幹教諭の職務の説明や、児童の学校での様子の紹介、保護者へのお願い等を行った。

また、学校連絡メールのシステムを一新し、不審者情報や学校行事の案内、学級ごとの連絡事項などが迅速に伝わるようにした。新規登録や配信エラー等についてのメンテナンスも年間を通じて担当した。

3 児童に関わる取組

担当する4年生理科の授業を充実させるとともに、全校児童向けの新聞掲示板を設置・運営した。新聞の中から、児童が興味をもちそうな記事を選んで掲示し、定期的に入れ替えた。

4 研究のまとめ

OJTの視点を生かし、職員への積極的な関わりを実践したことで、職員の理解を深め、実践への意欲を高めることができた。また、時機に応じた情報提供やアドバイスなどが、本校職員の資質の向上に役立った。

また、PTA活動への関わりや、保護者への情報提供を通して、保護者の学校教育への理解を深めることができた。

職員向けと保護者向けにそれぞれ発行した『主幹教諭だより』により、主幹教諭の職務内容についての理解を深めることもできた。

さらに、新聞掲示板の設置や理科指導の充実によって、児童の知的好奇心を高めることができた。

●奨励賞【論文概要紹介】

体験を基盤とした 問題解決学習の 授業づくり

～4学年「人の体のつくりと運動」、

「月と星」の授業実践を通して～

北海道中川町立中央小学校 久世真奈美

【実践の概要】

平成24年度に東京書籍により行われた小学校理科定着度調査の結果では、「知識・理解」は概ね定着しているが、それを活用する力に課題があるとの報告があった。要因の一つとして、自らの諸感覚を働かせ、体験を通した自然との関わりが少なく、受け身の学習や理科の有用性についての実感が乏しいことが挙げられると考える。そこで、体験を基盤としながら、問題解決を展開させていくことで、子どもが主体的に考え、確実な学習内容の定着と知識を活用する力を高めていくことにつながると考え、実践を行った。

今回は、4学年「人の体のつくりと運動」、「月と星」の単元を通して、本研究を明らかにした。

【論文内容の紹介】

1 研究の視点

問題解決の展開の中で重点的に行う体験を以下（次ページ）のように位置づけた。

（体験を重点的に行う場面）

事象との出会い

予想・仮説を立てるための自由な試行活動

観察・実験

確かな結論へ導く補助的な体験

↓ 実際の自然・日常生活へ振り返る

そして、具体的に三つの研究視点を立てた。

- (1) 問題解決における体験の充実
- (2) 確かな結論へ導く補助的な体験
- (3) 生活を振り返る体験活動の充実

このように、子どもたちは心の動きを伴う様々な体験を通して、自ら問題を見出し、思考を深め、主体的に問題解決をしていくと考え、授業実践を行った。

2 授業実践

(1) 「人の体のつくりと運動」

本単元では、以下のような実践を行った。

- ① 新たな気づきや自ら学習問題を見出させる「ぐにゃぐにゃの腕との腕相撲対決」
- ② 実際に見えない筋肉の様子を確かめ、理解の定着を図るメディアの活用
- ③ 学習を深める動物と自分の体との比較

意図した体験を通して、子どもたちは「当たり前」と思っていた事象に対して、自分の体の不思議さ・巧みさに改めて自ら気づき、問題解決学習を進めていった。単元の終末には、動物の体と人の体のつくりを比較し、体のつくりの相違について理解を深めるために、動物病院の方に協力していただき、子どもたちは動物の体を実際に触って学習を深めていた。

(2) 「月と星」

本単元では、以下のような実践を行った。

- ① 本物の月の観察をより多く行う
- ② 観察器具の工夫
- ③ 観察を補うプラネタリウムの活用

新たな気づきや事実から根拠に基づいた予想や仮説を立て主体的な問題解決をさせていくために、月の観察を何度も繰り返し行った。また、方位や高さを意識した正確な観察を行う手立てとして、観察器具の工夫を行った。さらに、確かな結論へ導くためにプラネタリウムを活用し、

実際に観察することが難しい月の一連の動き方について、自分の観察と照らし合わせながら、理解を深めさせた。

3 成果と課題

体験を一括りとして何でも「やってみる」ということではなく、問題解決の過程の中で明確なねらいをもって体験の場を設定することは、子どもが主体的に考え、学習していく上で有効であった。子どもたちは体験を通して思考していく中で、確かな知識・理解の定着へとつながっていった。しかし、理科の有用性を実感させるには、生活を振り返る体験を単元の終末だけでなく、あらゆる学習場面で展開する工夫が必要だと考える。学んだことをさらに興味をもって調べていく子どもや、「じゃあ、ほかのものは…」、「そういえば、これって…」と身近な自然事象に「ふしぎ」を見つけ出し、自ら学んでいく子どもを育てていきたい。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

小学校算数科における 反転授業への挑戦 ～実践事例報告～

宮城県富谷町立東向陽台小学校 さとうやすひろ
佐藤靖泰

【実践の概要】

本稿は、小学校第6学年の児童を対象に、算数科において一人1台のタブレットPCを使った反転授業の実践記録である。

筆者は、学習の前提知識の円滑な習得、協働学習の時間の確保、授業と家庭学習の連動化と

いった課題の解決の一方策として反転授業の導入を試みた。

結果、評価テストのクラス平均点は96.6点という期待得点を大きく上回る結果を得た。また各アンケートから、児童の94.1%、保護者の87.9%がタブレットPCを使った家庭学習は授業に役立つとの回答を得た。加えて家庭学習の時間について、児童及び保護者の実感としておよそ1.5倍、およそ1.4倍という結果を得た。

【論文内容の紹介】

1 はじめに

反転授業（Flipped Classroom）とは「説明型の講義をオンライン教材化して宿題にし、従来宿題であった応用課題を教室で対話的に学ぶ授業」（山内2012）とされる。今回筆者は「学習の前提となる知識をICTを使って予習させ、学校の授業ではそれを前提として応用問題に取り組んだりグループで課題解決したりする授業のスタイル」であると捉えた。

東北学院大学の稲垣忠准教授らの支援のもと、1クラス34名分のタブレットPCを活用できる環境を整えた。

2 家庭学習用動画

大型テレビ型電子黒板を使って教科書問題を解説する様子をビデオカメラで撮影した。各家庭のインターネット接続状況やセキュリティ等を考慮し、34台のタブレットPCにコピーする方法を採用した。動画は1本あたり5分程度を目安とし、できるだけ短いものとした。

3 基本的な学習プロセス

- ① 児童はタブレットPCを持ち帰る。
- ② 児童は家庭学習で動画を視聴する。
（動画はオフラインで視聴できる）
- ③ 動画の視聴は何度行ってもよい。
- ④ 児童は視聴した動画と教科書をもとに内容に即したノートをつくる。

- ⑤ 自作したノートには動画を見て分かったことや分からなかったことも書く。
- ⑥ 児童はタブレットPCを持って登校し、保管庫に入れて充電する。
- ⑦ 算数の時間の前に、教科書やノート等と同じようにタブレットを用意する。
- ⑧ 授業の導入では、ノートの確認や簡単な復習等を短時間でやる。
- ⑨ 本時の課題を提示し、個人やペア等で解決しタブレットPCに書く。
- ⑩ 電子黒板上に解決の過程をリアルタイムに表示し、参考にできるようにする。
- ⑪ 課題解決の結果の中から絞り込んで表示し、差違や共通点等を話し合いながら理解を深める。
- ⑫ 板書を整理したりつくってきたノートに書き込んだりして学習を記録する。
- ⑬ 授業の終末では、本時で学習した内容を適用する課題に個人で取り組む。

【まとめ】

反転授業には大きな可能性を感じるが、課題もある。例えば、保護者の理解、家庭学習環境の整備、ICT機器やネットワーク環境の整備などである。また、教師の意識改革も求められる。可能性があるならば挑戦する、挑戦するからには児童生徒に「分かった、できた」と実感させるという意気込みで、今後も精進していきたい。